

生前の空間、死後の世界

——隋唐長安の官人居住地と埋葬地——

はじめに——生と死をめぐる——

1. 隋唐長安住民の居住地と墓葬地をめぐる研究の現在

- (1) 新古墓誌の公刊
 - (2) 皇帝陵研究の現在
 - (3) 官人とその家族の墓
 - (4) ソグド人墓
 - (5) 一般住民の墓
 - (6) 墓葬壁画
 - (7) 喪葬制度
- ## 2. 長安城内の官人居住地と墓葬地の変遷
- (1) 隋唐墓の立地環境
 - (2) 官人の城内の居住動向と郊外の葬地の変遷

生前の空間、死後の世界（妹尾）

妹
尾
達
彦

- (3) 官品との対応関係
 - (4) 華妃墓盜掘の逸話
3. 死後の世界―墓壁画と線刻画に描かれた生前の生活―
- (1) 隋唐時代の死生観
 - (2) 壁画と石刻の描く長安の都市生活
 - ① 章懐太子・李賢（六五四―六八四）の狩獵図とボロ競技図
 - ② 延福坊（C 9）の李寿（五七七―六三〇）の樂舞図
 - ③ 安興坊（I 3）の蘇思勗（？―七四五）の樂舞図
- おわりに―死生観の変遷と世俗化の進展―

はじめに―生と死をめぐって―

生と死をめぐる人の認識の営みは、人類の歴史とともに古くかつ永遠に新しい。一般に、産業社会における近現代の死は、忌むべきものとして隠蔽される傾向が強いのに対し、前近代の死は、生と分かちがたく連続しており、誰にも見ることでできる共同体の出来事であったとされる⁽¹⁾。東西の死の歴史を論じる時に、今もしばしば引用されるフィリップ・アリエス Philippe Ariès (1914-1984) の概観によれば、西欧における死の歴史は、いくつかの段階を経て現在に至っているという⁽²⁾。

すなわち、自然の摂理に服従し共同体の一員として死んでゆく中世前期の「飼い慣らされた死 La mort apprivoisée」、続けて、現世への執着が生じて死を不幸とみなす一二世紀に始まる新しい死の概念としての「自己の死 La mort de soi」、死をより身近なものと感じるようになるルネサンスから一八世紀の「遠くて近い死 La mort longue et proche」、家族や恋人の死に対して強い感情で揺さぶられる一九世紀のロマン主義時代の「汝の死 La mort

de toi」、医療技術の進展によつて死期が曖昧となり死が社会から隠蔽され禁忌視される「転倒された死 La mort inverse」といふ諸段階である。

このようなアリエスの見通しについては、その後、単線的な進歩史観の色濃いアリエスの方法論にも、また分析の実証性についても批判が提起されている⁽³⁾。しかし、アリエスが概念化したような死の認識の変遷自体は、期的な違いや地域による感情の強弱はありながらも、西欧のキリスト教圏以外の地域にも、類似した現象を見ることができると感じる⁽⁴⁾。中国においては、西欧のような明確な変化をたどることは難しいにしても、前近代から近代にかけて、徐々に、死が共同体から個人のものに変化していったことは確かであり、西欧におけるキリスト教のように、四七世紀の動乱を契機に中国に広く浸透した仏教という世界宗教が、西欧ほどではなかったにせよ、既存の死の観念や冥界観に大きな変化をもたらしたことも疑いない⁽⁵⁾。

人類は、旧石器時代より、靈魂 immortal soul (精神) と肉体 body がそれぞれ別の実体をもつとする靈肉二元論 (心身二元論 dualism) についての観念を共有していたのではないかと考えられている⁽⁶⁾。中国でも、靈魂 (精神を支える魂) と肉体を支える魄 (魄から成る) の存在によつて、人は肉体の死後も生き続けるとされた⁽⁷⁾。一般に、魂は死とともに上天し、魄は肉体とともに地下の陰の世界に入るとされ、墓は、肉体を抜けて昇天した魂が、死者の身体に宿り続ける魄と合体して復活する場所として認識されていたのである⁽⁸⁾。

墓は、地上の世界が地下に再現されたものであり、魂と魄の往来によつて生と死が交替する場であった。そのような場にふさわしく、墓の形式は、戦国から秦漢にかけての時期を境に、竪穴墓から横穴墓に変化して、墓道・墓門・甬道・墓室をそなえた大規模な形式に変化し、地上の生活が地下に更に忠実に再現されるようになった⁽⁹⁾。

四七世紀における仏教の流入と浸透によつて中国社会は大きな影響を受けたが、隋唐代 (五八九—九〇七) になつても、特に貴族や官人等の上層階層にあつては、中国古来の靈魂観が基本的に継承されており、概して古来からの埋葬形式を維持している。ただ、火葬が隋唐代に相当広範囲に浸透したことも近年の研究で確かであり、今後の実証研究の進展を期待したい⁽¹⁰⁾。

隋大興城とそれを継承した唐長安城が直面した社会問題の一つは、数十万人という膨大な人口を擁する都城の住民と葬地の空間を、どのように確保して整備し管理するのかという問題だった。隋唐長安城の周辺には、被葬者の社会的地位や性別、職業、宗教、富の大小等によって違いはありながらも、無数の墓地が造営され、城内の居住地と城外の墓地はたがいにより密接に関連しながら長安の社会を構成していった。葬地の取得と造営、維持は、当時の城内住民にとって、切実な問題であり続けた。本稿で論じるのは、このような都城の住民と葬地の関連である。

隋唐長安の住民の居住地や埋葬地の変遷や、死後の世界への観念の変化については、もともと豊富な伝世の文献史料がある上に、近年における考古資料の急増によって、現在、詳細な復原が可能な状況が訪れている。現在利用できる史料は相当数になっており、史料の質も概して高い。ただ、研究が急速に進展しているとはいえ、残された情報の質量を考えると、都城と葬地をめぐる系統的な分析はまだ始まったばかりといつてよく、解明すべき問題は数多い。

居住地と葬地に関する西洋史や日本史の膨大な研究蓄積に比べると、中国史研究の場合、本格的な研究はこれからといってよいだろう。本稿は、このような研究状況をふまえ、隋唐の長安を主対象として、六～一〇世紀における生と死をめぐる中国の生活社会史研究に、一つの粗い見通しを述べることにあつた。もちろん、都城の居住地と葬地のありかたが、そのまま他の都市にも一般化できるとはいえないが、まず、都城において一つの見通しをたてることは、今後の統一的・系統的研究の進展のために、一定の意義があると思われる。

本稿の直接的分析対象となる長安城内の官人の居住地と郊外の埋葬地の変遷に関しては、筆者は、拙稿「唐長安城の官人居住地」〔『東洋史研究』五五―二、一九九六年、三五―七四頁〕と、拙稿「隋唐長安城と関中平野の土地利用―官人居住地と墓葬地の変遷を中心に―」（拙編『都市と環境の歴史学（増補版）』第三集、東京・中央大学文学部東洋史学研究室、二〇一五年、三一―八二頁）を公刊し、初步的な考察を行ってきた。上記の「唐長安城の官人居住地」は二〇年前の論文であり、その後に公刊された大量の墓誌によって官人居住地の事例を大幅に増補できる状況が訪れているので、現在、近年の史料・研究状況をふまえてできるだけ旧稿に補訂を試みている。ただ、官人居住地の変遷の傾向につ

いての上記論文の結論自体は、今も変更は無い。

墓の制度を研究する際には、墓主の階層や身分・性・職業（皇帝・皇后・皇帝親族・文武官・庶民・賤民などの別）や、墓の立地・建築構造・埋葬品（都市城内や幹線路との距離・墓室形式・埋葬と火葬の別・埋葬品の墓誌・墓蓋・壁画・明器の特色など）、墓をめぐる法制や礼制の実効力の程度や象徴性（葬喪令と葬礼の内容とその関係）、墓をめぐる思想（地域ごとの伝統や慣習、儒教・仏教・道教の影響など）などの情報を整理し、総合的に分析していかなくてはならない。このような系統的な分析なくして、死後の礼節ともいえる葬祭文化の全体を把握することは難しく、個別の事例のばらばらな集積に終わってしまう。研究の現段階は、地道に史資料を整理して大まかな概観を得る段階であり、隋唐墓葬制度の詳細かつ総合的・系統的な分析は、まだ先のことといえよう。

本論では、近年における史資料の飛躍的増加と研究の進展をふまえ、隋唐長安に居住した官人とその家族たちの城内の生活空間と城外の埋葬地の歴史の変遷を、改めてより系統的に論じてみたい。紙幅の制限と準備の都合により、本稿の分析の主対象は、長安の住民の中でも最も史料の多い官人層（流内九品）とその家族に絞りたい。この理由は、官人関係の史料の残存率が最も高いからであるが、官人の居住・埋葬動向が隋唐長安の都市社会の変遷を知る重要な手がかりになる、と考えるためでもある。本稿は、隋唐長安に居住した官人とその家族の生前と死後の世界の関連を、他の地域や時代と比較して広い視野から探る研究計画の一環をなすものである。

1. 隋唐長安住民の居住地と墓葬地をめぐる研究の現在

唐代長安城に暮らした住民、特に官人とその家族の墓葬地についての研究は、上述のように、近年次々と公刊されている新出墓誌によつて、初めて系統的な研究が可能となつてきている。ただ、基礎資料となる膨大な墓誌を系統的に整理し、墓誌からうかがえる唐代の葬喪制度の実態を復原して、その変遷を明らかにする研究は、まだ縮についてはかりで、研究の基礎となる情報の体系的な整理も始まったばかりといつてよい。ここでは、現在の研究状況を簡潔

に整理してみたい。

(一) 新出墓誌の公刊

長安住民の居住地と葬地をめぐる研究を進める際に、従来は、『石刻史料新編 第一輯～第四輯』（台北・新文豊出版公司、一九七七年～二〇〇六年）や『全唐文』（清・嘉慶年間）に所載の墓誌の分析を主としていた。その点において、新出墓誌約六、〇〇〇点を集成する周紹良主編『唐代墓誌彙編』上・下（上海・上海古籍出版社、一九九二年初版、二〇〇八年・二〇一二年再版）、同『唐代墓誌彙編続集』（上海・上海古籍出版社、二〇〇一年）の公刊は画期的であり、現在も研究の基礎を提供している¹⁾。本稿でも、同上書に収録の墓誌を主対象に、同書刊行後に刊行された新出墓誌集を活用して、都城の官人の居住地と官人とその家族たちの城外の墓葬地との関連を整理した。本稿の葬地の変遷の図の作図に際して使用した主な墓誌史料は以下の通りである。

- ①『石刻史料新編 第一輯～第四輯』（台北・新文豊出版公司、一九七七年～二〇〇六年）。
- ②（清）董誥等輯『全唐文』（北京・中華書局、一九八三年、影印嘉慶內府刊本）。
- ③周紹良編『唐代墓誌彙編 上・下』（上海古籍出版社、一九九二年）。
- ④同編『唐代墓誌彙編続集』（上海古籍出版社、二〇〇一年）。
- ⑤陝西省古籍整理弁公室編・吳綱主編『全唐文補遺 第一輯～第九輯』（西安・三秦出版社、一九九四年～二〇〇七年）。
- ⑥中国文物研究所・陝西省古籍整理弁公室『新中国出土墓誌 陝西 貳 上冊・下冊』（北京・文物出版社、二〇〇三年）。
- ⑦韓理洲輯校編年『全隋文補遺』（西安・三秦出版社、二〇〇四年）。
- ⑧王其禕・周曉薇編『隋代墓誌銘彙考』（北京・線裝書局、二〇〇七年）。
- ⑨西安碑林博物館編・趙力光主編『西安碑林博物館 新藏墓誌彙編（上）（中）（下）』（北京・線裝書局、二〇〇七年）。
- ⑩西安碑林博物館編・趙力光主編『西安碑林博物館 新藏墓誌続編（上）（下）』（西安・陝西師範大學出版總社有限

公司、二〇一四年)。

⑪趙文成・趙君平編『新出唐墓誌百種』(杭州・西冷印社出版社、二〇一〇年)。

⑫西安市長安博物館編『長安新出墓誌』(北京・文物出版社、二〇一二年)。

⑬胡戟・榮新江主編『大唐西市博物館藏墓誌 上・中・下』(北京・北京大學出版社、二〇一二年)。

⑭穆曉軍・宋英主編『長安碑刻』(西安・陝西出版傳媒集團、陝西人民出版社、二〇一四年)。

⑮西安市文物稽查隊編『西安新獲墓誌集萃』(北京・文物出版社、二〇一六年)。

⑯胡戟編『珍稀墓誌百品』(西安・陝西師範大學出版社、二〇一六年)。

(2) 皇帝陵研究の現在

皇帝陵(帝陵・陵)は、山陵とも称し皇帝の墓の尊称である。山陵の語は、君主の存在を高大な山陵(山岳)になぞらえ、一般人の墓と区別してよんだことにちなむ。皇帝陵の歴史は、いうまでもなく秦の始皇帝陵(当時の呼称は麗山^{りぜん})から始まる。漢王朝になって、平地に土を盛った四角錐の台形をなす覆斗式^{ふくと}の陵墓(皇帝の遺体の埋葬地)と陵寢(皇帝の霊が降り立つ場)をそなえ、陵園の構造をもつ皇帝陵の古典様式が定まった¹²。

漢代につくられた儒教にもとづく皇帝陵の古典様式は、多数の遊牧民が農業地域に進入する四世紀から五世紀の混乱期(五胡十六国時代)に変容を余儀なくされる。すなわち、中国華北に進出した遊牧系の諸政権は、遊牧民独特の陵墓形式と靈魂の祭祀法を中国華北に持ち込み、山谷に隠れて君主を埋葬し部族の墓を一定の場所に集めて陪葬する形式を広めた。五世紀末から七世紀始めの北魏隋唐政権は、山谷の聖なる地に君主を埋葬して陪葬墓をもつ五胡十六国以来の遊牧系の墓形式と、漢代以来の墓葬の古典様式とを合体させた皇帝陵を建造した¹³。

関中平野に今も残る隋文帝や唐高祖の陵墓は、覆斗式にもとづく古典様式であり、唐第二代皇帝・太宗(在位六二六―六四九)の昭陵(六三六年造営開始)から山陵形式が始まる。ちなみに、近年、調査の進んだ武則天(周王朝皇帝

の交通網と皇帝陵



⑩ 順宗豐陵 ⑪ 憲宗景陵 ⑫ 穆宗光陵 ⑬ 敬宗莊陵 ⑭ 文宗章陵 ⑮ 武宗端陵 ⑯ 宣宗貞陵 ⑰ 懿宗簡陵 ⑱ 僖宗靖陵

術出版会, 2011年) 122頁図8を訂補。本図は、黄盛璋「関中農田水利の歴史發展及其成就」(同「歴
 嚴耕望「唐代交通図考—(1)~(6)」(台湾・中央研究院歷史語言研究所專刊之83, 1985年)、史念海「開
 流域地区分布図」及び譚其驤編「中国歴史地図集 隋唐五代十国時期」地図出版社, 1982年)を
 283頁「図8-1 関中地区隋唐帝王避暑行宮分布示意图」に基づき、長安穀倉地帯の灌漑網は、妹尾
 理合作研究論文集第二輯 西安・陝西師範大学出版社, 1999年) 46頁所載付図「三原口・彭城堰
 辛德勇『古代交通與地理文献研究』(北京・中華書局, 1996年) 143頁図「隋唐時期長安付近陸路

※図中の矢印は日本の円仁(794-864)の歩いた道順を示す(『入唐求法巡礼行記』巻3, 卷4にもとづく)。